

# アメリカ版「ピアノのおけいこ」

松本 康子

体育会系ママ（前号参照）が力こぶを入れたのは、何もスポーツだけではありません。音楽も、現地校教育の中で足りないと感じたものの一つです。そこで単純に、音楽イコール「ピアノのおけいこ」と考えました。ところがアメリカ版ピアノの「おけいこ」が、想像もしていなかったハードなものでした。こんなはずじゃ、なかった！

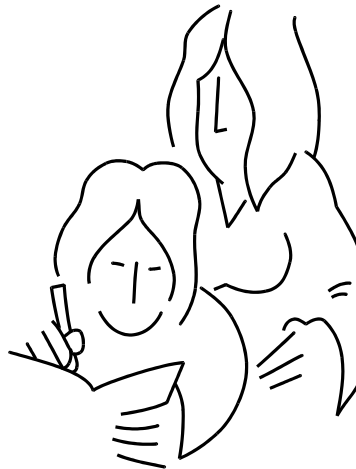
## <ピアノ>

なぜ音楽教育かと言えば、やはり日本の学校の教育が頭にあって、子どもにやらせた方がいいだろうと。それに、私自身、音楽環境に囲まれた生活が好きだったのが、大きな原因です。何か習わせておけば、将来、子ども達が私に楽器を演奏して聞かせてくれるかな？なんていうステキな夢を見たんですね。それで、単純に、音符を読めるようになって、ある程度は楽器演奏をこなせる年数を考えたら、手っ取り早くピアノでしょうと。

その当時、長女は小学校1年生を終了。夫の大学院卒業で引越しという環境の変化もあり、新しい事を始めるのに丁度いい時期でした。それに、毎日、隣の大家さんちのジュンちゃん（小6）の演奏が私たちの耳まで届きます。「ジュンちゃんみたいに上手になりたい」と子ども達に言わせた、とってもいいお手本がいることだし、さっそくピアノ購入へ。

1940年制作の中古のコンソール・ピアノ。少しハンマーがへたり気味で、しかも鍵盤の角の象牙のあちこちが欠けていました。それでも、今まで遊びで使っていた幼児用の3オクターブしかキーのないものから、とっても古くて美しいとは言えないけれど88鍵のスマートな容姿のピアノ。それに、象牙の鍵盤の音が本物のピアノらしく、子どもの目はキラキラ。お母さんも子どもと一緒に「嬉しいね」。

今、その初代ピアノさんは、長女が小学校6年生で一つ賞をいただいた記念と、体力的にもいいでしょうとベビー・グランドに取り代わられ、骨董品という名の我が家の置物に。



## < Mrs. Dohzen >

ジュンちゃんのお母さんに、ピアノの先生について相談してみました。聞けば、先生はフルタイムの仕事のかたわらにピアノを教えているだけで、生徒さんをたくさん取らないらしい。ところが、お母さんの仲介があったからなのか、引き受けてもらえる事に。

この先生は Mrs. Dohzen という名の日系人で、アメリカの音楽界で有名な USC（南カルフォルニア大学）のピアノ科を卒業。先生が子ども達を熱心に指導してくださったのはもちろんですが、単に教え子というだけでは言い表せない、情愛をもって接してくださった尊敬すべき恩師です。この方との出会いで、子ども達は信頼関係の築き方をも体得したように思います。

最初のレッスンで、Mrs. Dohzen がおっしゃった言葉がとても印象的でした。「私たちの時代は日系人が働く機会に限りがあり、女性などはピアノ教師になるくらいしかなかった」「お子さんをプロの音楽家にするつもりはないのでしょうか？」「今は時代が違うので、彼女たちはなろうと思えば何にでもなれるのでしょから、しっかり勉強するのがいいですね」と。まさに、子どもをプロのピアニストにするつもりもなく、家でどれほど練習させればいいのか悩んでいたところへ、「あまり肩に力を入れないで」と、言われたような気がしました。

反面、「子どものアカデミックな教育は体系的なトレーニングであり、レベルごとのハードルを越える作業の繰り返しですから、小さな子どもにピアノに向かう『自発性』や10分以上の『独習』を期待しないように。」「家庭でのサポートが不可欠です」「子どもと一緒にレッスンを受け、家庭で、私の書いた注意書きノートを確認させて復習・予習させること」と、「子どものおけいこは親のおけいこ」だとも言われたのです。初めに、親が子どもに音楽への興味を持たせたのなら、子どもがその興味を持ち続けられるように、努力（サポート）するべきなのでしょう。根がまじめな(?) 私ですから、その先生の言葉を忠実に実